

明石工業高等専門学校図書館

図書館報

第49号 平成26年1月

目次

海賊と呼ばれた男(上・下)・(1)	(1)
自著紹介・・・・・・・・・・	(3)
私と読書・・・・・・・・・・	(4)
購入希望図書案内・・・・・・・・	(5)
読書感想文コンクール・・・・・・・・	(6)
ブックハンティング・・・・・・・・	(10)
推薦図書・・・・・・・・・・	(11)
利用統計・・・・・・・・・・	(12)
利用案内・・・・・・・・・・	(13)
海外の図書館・・・・・・・・・・	(14)

「海賊と呼ばれた男（上・下）」 百田尚樹著

京 兼 純

国立高等専門学校機構は国際協力機構（JICA：Japan International Cooperation Agency）と協働で、本年10月からベトナム・ホーチミン工業大学・タインホア分校で石油人材養成に関するプロジェクトを開始します。タインホア州はハノイから約300Km離れた場所にあり、良質な油田をもっています。ベトナムは良質な原油が出ますが、大部分を輸出しており、逆に精製された石油製品を輸入し、慢性的に貿易収支が赤字となっています。これを解消するためにベトナム政府は、新たに自国で原油から石油製品をつくりだす、大規模なコンビナートの建設を進めることにしました。高性能なコンビナートを継続的かつ安全に稼働させていくには、工学に裏打ちされた技術者が必要となります。

そこでベトナム政府は日本政府（外務省）に協力を要請し、このたび外務省が管轄しています JICA から高専機構に対し依頼がありました。高専機構では石油精製技術に直接関係があります、全国の化学系教員を対象にタインホア分校へ派遣します。当面は秋田高専の物質化学工学科を中心にして、カウンターパート（C/P：ホーチミン工科大学の教員）の技術教育や実験・実習支援などを行い、また、ベトナムの先生方を全国の高専に派遣して、各種の技術指導を実施していくことになっています。明石高専は、昨年度、ホーチミン市工業大学の土木系学科と包括協定を締結しており、今後、都市システム工学科を中心に学术交流を進めます。JICA 石油人材養成プロジェクトに関しては、C/P 受入れなど側面から支援をしていく予定です。

さて前置きが少し長くなりました。今回、取りあげた本は「海賊と呼ばれた男」です。本書は石油とともに歩んできた男の物語です。モデルとなった主人公は、題名のない音楽会やアポロマークで良く知られた出光興産を一代でつくりあげた出光佐三氏です。私自身は「海賊」という刺激的な名前がついていましたので、原油を求めて海外に進出し波瀾万丈の人生を送っていたと思っていました。主人公は北九州の片田舎から石油販売で身を立て、戦前・戦後をダイナミックに生き抜き、石油精製から販売までを一貫して行う日本を代表する大企業に育てあげました。「海賊」という名前はユニークな発想により、関門海峡で行った石油販売にからんでつけられました。

先の東日本大震災（3・11）では津波がもたらす甚大な被害とともに、自然のもつ脅威を目の当たりにしました。なかでも福島原子力発電所の津波災害は、私たちに對し多くの課題を突きつけるものとなりました。江戸から明治になり我が国は西洋の文明を導入し、猛烈なスピードで工業化を進めてきました。工業製品をつくりだすためにはエネルギーが必要不可欠となります。時代の流れとともに産業構造も変化し、多様な企業が現れ、人や物を担う交通手段も変化し多量のエネルギーを消費するようになってきます。当時、石炭以外の化石燃料をほとんど産出しない我が国では、エネルギー問題が浮上してくるのは必然的なものでした。物語の主人公は石炭火力によるエネルギー利用が全盛のとき、いち早く石油の重要性を認識し獅子奮迅の努力をします。とりわけ小説の後半部分は、戦後の混乱期にあっても従業員を非常に大切にしつつ、石油をめぐる利権でGHQや役所の権威に屈せず対峙（たいじ）したこと、我が国の窮乏を救った日章丸（石油タンカー）にまつわる話など、幾多の苦難をものともせず臨んだ主人公の一徹した姿は清々しささえ感じます。

物語のあらすじは以上ですが、最後に皆さんと一緒にエネルギー問題について考えていきたいと思ひます。現在、世界各国では産業活動や社会生活を維持するための基盤の一つとして、電気エネルギーが使われています。私たちは電気エネルギーをはじめ日々莫大なエネルギーを消費することで生活ができています。ご承知のように電気を発生する手段としては、化石燃料（石炭・石油・天然ガス）、原子力、再生可能資源（水力・太陽光・風力・地熱・波力・バイオ）があります。また、電気エネルギーへ変換するため使用される化石燃料、原子力、再生可能エネルギーの割合は、我が国で、それぞれ凡そ 66.4%、23.6%、10%（2010年当時）となっており、燃料の80%強が輸入に頼っています。福島での災害の後、原子力エネルギーに関しては人々の意識にも差が出てきているところですが、これを境にしてエネルギー発生効率を向上させるための新規技術の開発等が進められています。しかしながら、化石燃料のうち石炭以外は21世紀中に枯渇するとの報告がなされ、また燃焼によるCO₂問題もあり、再生可能エネルギーは安定かつ大規模な発電には不向きといわれています。なかでも人類が創り出した原子力によるエネルギー生成は、重水素を用いた将来のエネルギー源である核融合炉の実現と相まって、世界中の研究者や技術者が協働で従前以上に、おおくの叡智を結集して進めていくことが肝要となります。

工学と技術を専攻している私たちは、こうした多様で複雑な問題を真摯に受け止め解決を図っていく必要がありますし、さらに自然と共に生かされているという「共生」を念頭に入れることも重要となってきます。明石高専では「共生」という言葉を教育理念としています。エネルギーや環境問題など、それらを左右する工学と技術（技学）は、21世紀を私たちが生きていくために極めて大切なものです。是非、皆さんには学習のあいまいに「共生」のもつ意味を、いま一度考えていただければ幸いです。

（きょうかね じゅん 校長）



「海賊と呼ばれた男（上・下）」 百田尚樹著
講談社，2012.7

ISBN: 9784062175647(上) 9784062175654(下)

上巻 請求記号: 913.6.H 登録番号: 103865

下巻 請求記号: 913.6.H 登録番号: 103866

自 著 紹 介



岩野 優樹

『ロボティクス』
日本機械学会著
一般社団法人日本機械学会
ISBN978-4-88898-208-5
請求記号：548.3.N 登録番号：103952

この教科書を手にとってまず驚かされるのは、その表紙のデザインです。従来の教科書とはひと味違う、黒を基調とした表紙を見た時には思わず「カッコイイ」と口にしてしまいました。しかし、当然良いのは表紙だけではありません。ロボット研究の最先端を走る、20名を超える研究者が共同で執筆しているのです。一番の特徴は、各要素を学んでからロボット全体を見ていく、という従来の教科書の流れとは全く逆の順序で構成していることです。つまり、まず例となるロボットを紹介してから各要素を学んでいく、という構成となっているので、学生にとっては非常にわかりやすくなっているはずです。この教科書は、「平成24年度日本機械学会 教育賞」を受賞していることから、専門家からも高い評価を受けていることがわかります。

対象は、大学3、4年生（専攻科生）以上ですが、ロボットの興味のある学生は、ぜひ一冊持つておくことをオススメします。

(いわの ゆうき 機械工学科)

自 著 紹 介



中川 肇

『基礎から学ぶ建築構造力学
理論と演習からのアプローチ』
中川 肇著 井上書院
ISBN978-4-7530-0652-6
請求記号：524.1.N 登録番号：104077

建築構造力学を教えるのにあたり、困ったのが教科書の選定である。建築構造力学は、建築構造を学習する上での基礎学問であり、わかりやすい教科書の必要性を感じ、平成20年より執筆を始め、平成25年9月に出版となった。本書は、高専生および大学生を対象に1～14章を「静定力学編」、12章、15～18章を「不静定力学編」と区分し、理論をできるだけ丁寧に解説し、例題および演習問題を通じてより理解が深まるように編集した。

また、本文の中に【注意しておきたいポイント】という記述が随所に登場する。これが、本書の特徴の一つである。本書は、建築構造の基礎は勿論、大学3年次編入学試験、大学院前期課程入学試験、1級・2級建築士学科試験にも対応できるように編集しているので、ぜひ、この機会に読んで頂きたい。平成26年度より、4年建築学科の必修科目「建築構造力学Ⅲ」の教科書として使用しますので、楽しみにしておいて下さい。

(なかがわ はじめ 建築学科)

私と読書

稲積 真哉

最近、新聞の朝刊を毎朝読むことが日課の一つになっています。（「新聞を読む」とタイトルにある「読書」とは合致しませんことを了承下さい。）ある日の朝刊で、ある業界では未だに「人材が足りない」という記事が出ていました。この人材は、本当の意味での「人材」でしょうか。広辞苑によれば、人材とは“才知ある人物、役に立つ人物”と書かれています。一方、人手は“他人の手、他人の助け、働く人、働き手”とあります。この朝刊に書いてある業界は、かなり的人数を採用する業界のようですが、本当に「人材」が欲しいと思っているのでしょうか。「人材」が欲しい企業は、それほどたくさん的人数を採用しないのではないのでしょうか。なぜなら、雇った直後の人はまだ「人手」であって、それを「人材」までに成長させるには、時間と投資が必要になるからです。多くの人を雇ってしまっただけでは「人手」を「人材」に成長させる時間と投資が希釈されてしまい、「人材」への成長が見込めないからです。私は高専教員として「人材」を育成することが使命ですので、この点の認識をしっかりとっておき、学生の皆さんにも、このメッセージを伝えようと思います。

（いなづみ しんや 都市システム工学科）

BOOK *BOOK* *BOOK*

私と読書



桑原 伸弘

『中国古典一日一話』

守屋 洋 著

三笠書房

ISBN4-8379-2067-5

請求記号：122.72.M 登録番号：104116

三国志の英雄や日本の武将、皇帝ナポレオンなど歴史上の名将たちは常日頃から中国古典を読み、政治や組織のまとめ方、人との接し方や物事の考え方などを学んだという。

この本には、老子や孔子、孟子など中国古典の偉人たちのことばや考え方などのエッセンスが集約されてある。1日1話形式で編集された本であり、寝る前に1話ずつ気楽に読むことができ、かつ何度読み返しても勉強になる。

「これを望めば木鶏に似たり」（荘子のことば）

厳しい訓練を積み、鍛え上げられた闘鶏は、まるで木彫りの鶏のように不動であり、この姿を見るだけで他の鶏は恐れ逃げていく。人間も同じで、努力を重ね、徳が内に充満している人は、無言の説得力で周囲の人々を感化することのたとえ。

薄っぺらい努力ではとうてい到達することのできない域であり、自分自身の甘さを反省することばである。

先人の知恵には学ぶべきことが多く、ぜひ実生活で活かしてもらいたい。

（くわばら のぶひろ 一般科目）

購入希望図書案内

図書館に備えてほしい資料があれば、MyLibrary 経由でお申し込みください。資料の種類は、図書、視聴覚資料などジャンルは問いません。以下の選書基準と予算に応じて、ご要望にお応えしています。MyLibrary へは、図書館ホームページよりアクセス出来ます。学生証の ID とパスワードが必要になります。パスワードの初期登録は図書館カウンターまで。

図書館ホームページ（ <http://www.akashi.ac.jp/lib/index.html> ） の下記○部分

（平成 24 年度は購入希望により、165 件の図書等を購入しました。）

学生希望図書の選書について

平成 25 年度第 1 回図書館委員会により、学生希望図書の明確な選書基準を設けました。

【選書基準】

- ・ 勉強及び研究で利用する書籍を優先的に購入する。
- ・ 文学的な小説などは優先的に購入する。
- ・ 公俗に反するような書籍は購入しない。
- ・ 学生にとって好ましくない内容の書籍、学校の図書館に設置するには相応しくないと判断される書籍は購入しない。

上記の基準以外で判断しにくい書籍に関しては、外部の図書館の状況や外部識者の意見をもとに図書館長が判断する。

【選書例】

- ・ 漫画△ ライトノベル× バンドスコア× イメージイラスト集×

平成25年度『読書感想文コンクール』表彰式



校長先生を囲んで記念撮影

平成25年12月12日、校長室において平成25年度読書感想文コンクール表彰式が行われました。今回の読書感想文コンクールでは65名の応募者の中から下記の3名が入賞し、京兼校長より賞状並びに副賞が授与されました。

今回は、最優秀賞に2作品が選ばれました。国語科教員による一次審査と図書館委員による二次審査の結果、青木さんと白神さんの作品が同率で1位となったためです。“最”優秀が2作品ということに対して、語義的に疑問を持たれる方もいらっしゃるかもしれません。図書館委員会でも、最優秀賞と優秀賞を決めるべきか検討しました。しかしながら、両作品とも非常に優れたものであり、優劣をつけることが難しく、その結果として一次及び二次審査による得点が同率となったという結論に至りました。そのため、変則的ではありますが、今年度は最優秀賞を2席とし、優秀賞をなしと致しました。後掲の両作品をお読みいただければ、みなさまにもこの決定にご納得いただけるものと考えております。

最優秀賞	建築学科	5年	青木 翔汰
最優秀賞	建築学科	3年	白神 萌江
優良賞	機械工学科	3年	倉橋 鉄平

平成25年度『読書感想文コンクール』入賞作品

「祈りと奇蹟の物語」

最優秀賞 建築学科5年 青木翔汰

今年の一月、私の父が倒れた。脳出血だった。助かる見込みはない、と医者は言ったが、それでも父は奇蹟的に一命を取り留めた。しかし、意識を取り戻しても、父が言葉を発することはなかった。私たち家族が声を掛けても、反応は無い。脳出血の後遺症だった。父が私たちを認識しているのか、そのことすら分からないまま、その二週間後父はこの世を去った。

私がこの本を読んだのは、その頃だったと思う。この物語の主人公は、事件に巻き込まれて指と将来を奪われた、元ピアニストの敬輔。敬輔を義理の父親として慕う、脳に重い障害を持ちながら、天才的なピアノの演奏技術を持つ少女、千織。そして敬輔と運命的な再会を果たすことになる、療養所のスタッフ、真理子。敬輔と千織がコンサートを行うために立ち寄った脳障害療養所で起こった、三人を巡る不思議な奇蹟が描かれている。脳障害、そして登場人物に突然突きつけられる死の運命を扱ったこの作品を、私は私たち家族が置かれた境遇と重ね合わせるように読んでいた。



冒頭、療養所近くの研究所に到着した敬輔は、赤い夕焼けを背に山頂の療養所から礼拝堂へと向かう影の列を見る。これを彼は聖者の行進、また救いを求める者たちの群れ、と表現している。このシーンは、この物語が描くものがただ単に幸福な奇蹟ではなく、満たされない救いや祈りに対して向けられる奇蹟である事を暗示していた。

実際、「奇蹟の始まり」として描かれたのは、ヘリコプターの墜落という凄惨な事故だった。この事故で千織をかばった真理子は重体となり、真理子の意識は、千織の体へと入り込んでしまう。そして、自分に残された時間が四日間であり、その四日間が過ぎれば、体を千織に返し、自分の意識は消えてしまうこと、つまり、自分が生きながらえる術がもはやない事を知る。敬輔と千織の中の真理子は突然のことに戸惑いながらも、最後の四日間を過ごす。

終盤、礼拝堂で起こった最後の奇蹟によって、真理子と敬輔の祈りは成就する。それと同時に、真理子の意識は完全に消えてしまう。その奇蹟の直前、真理子は言った。「未練はいっぱいある」だが、「胸を張って向こうに行ける。だから、怖くない」。それは、それまで頑なに死から目を背けようとしていた真理子が自分の死と向き合い、祈りの末に魂が救われた瞬間だった。

死を目前にして、真理子も、私たち家族も、叶わないと知りながら、どうにか生き長らえることを願っていた。どちらもその祈りは最後には死という形で終わってしまうが、それは決して祈りが裏切られたというわけではなかった。真理子と敬輔の祈りは四日間の奇蹟の末に夢が叶うという形で、私たち家族の祈りは、父と過ごす最後の二週間という形で、奇蹟となって成就した。祈りとは、奇蹟という救いを求めながらもそれと同時に抱く覚悟だと言えるのかもしれない。だからこそ、私は父の死を受け入れることができたのだと思う。意思の疎通ができなくても、父と過ごす最後の二週間は私たち家族にとってかけがえの無い時間だった。

だが、死を受け入れることができても、真理子と同じように、残された私たちにも未練は沢山ある。最期するとき、私の父が何を思っていたか、何を願っていたか、何を遺したかったのかを知ることは、もはやできない。だが、死んでいった人間が遺していったものを見出すことはできるはずだ。物語のエピローグ、すべての奇蹟が終わった後、千織は意識を取り戻す。そのとき、千織の脳障害は改善しており、また、真理子と同じ、敬輔への恋心を抱くようになっていたことを、敬輔は知る。それは紛れも無く、最後に真理子が残していったものだった。

そういったものはきっと死んでいった人間が明示するものではなく、残された人間たちが発見していくものなのだろうと思う。そして、父が遺していったものを発見する度に私はあのささやかな二週間の奇蹟と、この物語を思い出すのである。

(『四日間の奇蹟』／浅倉卓弥著 宝島社 2004年)

「パンドラの匣」を読んで

最優秀賞 建築学科3年 白神萌江

私は今、病気を抱えたまま学校に通っている。つらいこともたくさんあって、ちょうどこの春はそれが重なってしまった。体調はどうやっても落ち着かないし、どっちを向いてもテストや課題に、困難だらけで、追い詰められてしまっていた。

そんなときに偶然この本を読んだ。衝撃だった。彼らは死と隣り合わせの結核だ。しかし、彼らを感じていたのは、希望だったのだ。

「ひばり。」

「なんだい。」

「やっとなるか。」

「やっとなるぞ。」

「がんばれよ。」

「よし来た。」

これが合言葉のように交わされる病院。彼らは、自ら治るために運動や摩擦を行っていた。その前向きなエネルギーに、私は圧倒された。

その背景にあったもの、それは「新しい時代」だった。戦後すぐの、それまでの価値観がまるごと変わった時代。私たちは知らない。しかし、羅針盤を失った私の胸にとても自然にすんと落ちた。

理由やこだわりが例えなくても、日の当たるほうへ進んで行けばいい。死を尊び、それをよいものだと言い切るけれども、決して投げやりではない。気取らず、気負わず、生きてゆく。そんな「新しい自分」。主人公は何度も、まるで確認するように繰り返す。それは合言葉となって、主人公や周囲の人間の姿勢を変えていく、そう見えた。そこでは絶望は当たり前だった。死と隣り合わせなのも、物資の不足も、自分たちが病気であることも。だからこそ、自分たちには、一輪の花の微笑のほうが心に沁みるのだと主人公は綴った。

私は思った、私の姿勢は間違っているのではないだろうか？ 困難を、絶望の理由を数えても、それは何も変わったりしない。

希望を、根拠のない希望こそ、感じられる心が必要なんじゃないだろうか？

これは、ギリシャ神話「パンドラの匣」を題材とした話だけれども、ここに匣は出てこない。匣が終わりのない不幸を振りまいた、その続きを私は知らなかった。

実は匣の隅には、けし粒ほどの小さな光る石が残っていたのだ。その石には幽かに「希望」と書かれていたという。

絶望の先にこそ希望があるなら、もしかすると、私の病気が持ってきたものは「試練」ではなかったのかもしれない、と私は思った。こうなって初めて、思うように体が動かないことのもどかしさを、普通に勉強できないことの苦しさを知った。そして、そんなときかけられる、何気ない一言に、どれほど救われるかを知った。私にも、がんばれよ。よし来た。そう言い合える人が確かにいる。一人じゃない、その言葉が実感を伴ったとき、これほど頼もしく自分を支えてくれることに、私は驚いたのだ。例え、将来の展望がゆらごうとも、今の自分を見失おうとも、この感謝の気持ちだけは決して変わらず、確かに私を支えてくれる。それを「希望」と言わずして何と言うだろう。

私はそのとき、目には見えない何かを、信じようとしていた。例え困難がたち並ぼうとも、日のあたるほうへ進んで行けばいいのだと思った。そして日の光を感じられるその心に、ようやく私は気づいたのだ。その幽かな.....しかし、確かな「希望」を、私も多分見つけたのだ。

読み終えたときの、あの晴れやかな気持ちを私は忘れないだろう。主人公が繰り返していた「新しい時代」が、確かに周囲に広がって、みんなで新しい船出を迎えている、それがありありとわかった。そして私も、多分そのときその船に乗っていたのだ。見つけたばかりの確かな「希望」を握りしめて、私は、日の当たる道に沿ってまた歩き出そうとしていた。



(『パンドラの匣』／太宰治著 新潮社 1973年)

「城のある町にて」を読んで

優良賞 機械工学科3年 倉橋鉄平

「セミは、気温がある一定のラインを超えると鳴くようになっているらしいですよ。」と、とあるラジオ番組のパーソナリティーが言っていた。それを耳にして以来、蝉の事に思いを巡らす度に、そのことを思い出すようになった。深夜まで蝉が鳴いていたりすると、「今日の夜は特に暑いんだな。」と思ったりして、しばしば、この夏の暑さなんかはまで思いが及ぶのであった。

この小説、「城のある町にて」は、蝉のまだ鳴いている初秋、主人公（峻）がある城跡に登っているところから始まる。幼くして死んだ妹の事を落ち着いて考えてみたいという感慨から、峻は彼の家を出て姉の家へ行く。この土地に来てからようやく妹の死の前後の苦しい経験が、薄いヴェールの向こう側に感じられるようになる。そして、新しい環境に馴染んで来るにつれて、峻には静かな気持ちがやってくるようになる。この小説は、そんな峻の眼に映る事物について、彼が考えを巡らせる。という内容である。

さて、その最初の城跡のシーンである。このシーンは、城跡からの風景の描写、言葉によるスケッチに多くの紙面が割かれている。それがたまたま素敵で、その時代のその季節の、その城跡の上で、初秋の清潔な風を身に受けているような感じを覚えた。特筆すべきは蝉の描写である。それは文章にすると約1ページ分のものである。文が進むにつれて蝉の像が自然に脳裏に浮かび上がり、その細部はどんどん鮮明になってくる。蝉の像がだんだん近くにまで迫ってきて、その存在感を増していく。ついにはその蝉を手で掴み、指の先で蝉の生命から生じる反発力を感じているように錯覚した。心に浮上したそんな城跡の情景が、現実には部屋に吹き込んできている秋風とともに共鳴した。そしてその振動が、胸の中に豊かな響きとして長く残った。

たくさんの石を、この小説は投げてきた。僕の心の中、胸に満たされた液体の中に。その池とも海とも、コップの中ともつかない、漠然とした水たまりの中に。その水たまりの水は純粋な水ではなく、いろいろな溶質が溶け込んでいる。動物性または植物性のプランクトンや、小さな魚、虫、草が、その中で暮らして、生態系を作っているようである。そんな水たまりの中に、言葉が、まっすぐな放物線でもって石のような、密度の高い、握りこぶし大の物体となって投げ込まれる。普段気にしないような、ありふれた生活の一場面や遠い日の記憶が、水たまりの底に豊かな沈殿物となって溜まっている。それに石がぶつかる。沈殿物が巻き上がる。その巻き上がったのを水棲動物がぱくぱくと食べて栄養と成し、心の活動の原動力となるのである。

そんなやり取りが、この小説を読んでいる最中に繰り返された。とても素直な、創作物と心とのやり取りだと感じた。

しかし、ふと、気が付いた。峻の眼を通して描かれる、生き生きとした生物の営みの底には、常に峻の妹の死という存在がうっすらと、けれども確実に横たわっていることに。そしてそれこそが、この小説の美しさと爽やかさを支えているということに。このことが、濃度の高い墨汁の一滴となって心にポトンと垂れ落ちて、じんわりと広がっていった。僕はそれをどうすることもできなかった。

さっきまで部屋に吹き込んでいた秋風は弱まって、少し静かになった。するとツクツクボウシが、たった一匹、今まで忘れていたのを急に思い出したように鳴き始めた。それを最後に、今年の夏はもう蝉の鳴き声は聞いていない。



（「城のある町にて」『梶井基次郎』／梶井基次郎著 筑摩書房 2008年）

ブックハンティング

今年度より、試行的にブックハンティングを行うこととなりました。ブックハンティングとは書店に直接出向いて、学生の皆さんの視点で本を選び購入するというイベントです。購入した書籍は学校の図書館に開架します。いつもは図書館で希望図書を注文する機会しかありませんが、ブックハンティングでは実際手にとって他と比べながら本を選ぶことができます。学年学科を越えた学生の交流の場として楽しい時間を過ごして頂く予定です。

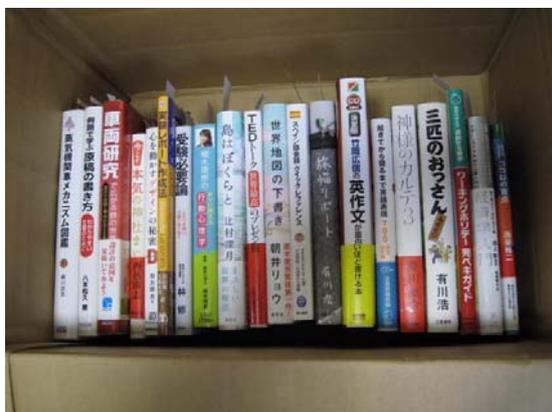
実施日時：平成25年12月14日（土）13：00～15：00

実施場所：神戸三宮ジュンク堂書店

参加人数：学生15名（+図書館長・事務職員）

12月14日（土）、三宮のジュンク堂書店にて初めてのブックハンティングを実施しました。

参加学生は15名で、50冊ほどの書籍を店頭選書しました。学生たちは、コンピュータやプログラミング関係、機械関係の書籍はもちろんのこと、語学参考書や進路対策、最近の流行の小説に至るまで幅広い書籍を選んでいました。書籍が図書館に納入されましたら、その本を選んだ学生に簡単なコメント入りの本紹介のポップを作成してもらいます。年明けしばらくしましたら、学生からの紹介文と共に選ばれた本を図書館に開架しますので、一度手に取ってご覧いただければと思います。





平成25年度学生用推薦図書・雑誌

推薦図書コーナーに開架しています。(以下、抜粋)

誌名	請求記号	登録番号
機械工学科推薦		
東京大学大学院:材料力学入試問題と解答集	531.3.N	103947
生体機械工学	492.8.N	103950
先端事例から学ぶ機械工学	530.0.N	103951
ロボティクス	548.3.N	103952
カム機構ハンドブック	531.67.N	103949
「日経ものづくり」	雑誌	
電気情報工学科推薦		
合点!電子回路超入門	549.3.I	103941
電気機器学の講義と演習	542.0.H	103937
スズキさんの生活と意見	914.6.S	103938
「OHM」	雑誌	
「トランジスタ技術」	雑誌	
「日経Linux」	雑誌	
都市システム工学科推薦		
全世界の河川事典	517.2.T	103975
実務者のための戸建住宅の地盤改良・補強工法 考え方から適用まで	527.0.N	103969
東北地方太平洋沖地震による津波災害から学ぶ	453.4.D	103972
巨大津波災害から学ぶ	369.31.A	103965
だれでもできるホテル復活大作戦—ぼくらの町にホテルがもどってきた	486.0.O	103958
ビオトープ再生技術入門—ビオトープ管理士へのいざない	519.8.Y	103974
建築学科推薦		
建築施工テキスト 改定版	525.0.K	104017
【図解】建築の構造と構法	524.0.S	104013
建築・都市計画のための調査・分析方法 改訂版	525.1.N	104027
リアル・アノニマスデザイン：ネットワーク時代の建築・デザイン・メディア	757.04.O	104022
五感のデザインワークブック	757.07.Y	104028
やわらかい建築の発想 —未来の建築家になるための39の答え	520.4.I	104023
一般科目推薦		
システム英単語(改訂新版)CD	-	-
貧乏人の経済学—もういちど貧困問題を根っこから考える	331.87.A	104070
漢文の素養—誰が日本文化を作ったのか?	811.2.K	104062
大学への橋渡し 一般化学	430.0.S	104066
近代世界システム<1>—農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立	332.06.I	104064
「CNN English Express」	雑誌	

全 97 冊、雑誌 8 種

詳しくは、図書館 HP (<http://www.akashi.ac.jp/lib/siryousuisen13.htm>) をご覧ください。

利用ランキング 2012.10.1 - 2013.9.30

—図書—

- ① 46回 「TOEIC テスト新公式問題集 Vol.5」
- ② 35回 「土質試験の方法と解説」
- ③ 29回 「TOEIC テスト公式プラクティス リスニング編」
- ④ 28回 「新 TOEIC TEST 文法・語彙問題秒速解答法」
- ⑤ 26回 「新 TOEIC テスト1週間でやりとげるリスニング」
- ⑥ 25回 「TOEIC テスト新公式問題集 Vol.2」
- ⑦ 23回 「TOEIC テスト新公式問題集 Vol.3」
- ⑦ 23回 「TOEIC テスト新公式問題集 Vol.1」
- ⑦ 23回 「TOEIC TEST リーディングベーシックマスター」
- ⑩ 22回 「新 TOEIC TEST 文法・語彙でとこだけ！問題集」

—雑誌—

- ①273回 「新建築」
- ② 97回 「新建築,住宅特集」
- ③ 83回 「A+U」
- ④ 81回 「住宅建築」
- ⑤ 46回 「ディテール」
- ⑥ 30回 「日経 Linux」
- ⑦ 29回 「建築知識」
- ⑧ 25回 「建築画報」
- ⑨ 19回 「Newton」
- ⑩ 17回 「English express」

—DVD—

- ① 9回 「ミッション・インポッシブル ゴースト・プロトコル」
- ① 9回 「ステキな金縛り」
- ③ 8回 「カーズ2」

図書館利用状況 (平成20年度から平成24年度)

項目 / 年度			20年度	21年度	22年度	23年度	24年度
年 間	入館者数	時間内	35,768	36,114	38,734	31,755	29,810
		時間外	8,955	8,318	7,132	6,714	9,874
		計	44,723	44,432	45,866	38,469	39,684
	AV ルーム	計	2,839	2,042	2,358	1,896	1,677
	貸出者数	計	3,382	4,185	4,103	3,649	4,072
	貸出冊数	計	6,683	7,754	7,666	7,014	7,271
	開館日数	年 間	291	283	292	290	288
一日平均	入館者数(時間内)		147	152	162	110	104
	入館者数(時間外)		38	36	30	23	41
	A V ルーム		10	7	8	7	6
	貸出者数		12	15	14	13	14
	貸出冊数		23	27	26	24	25

【開館時間】 時間内：平日 8:30～17:00 時間外：平日 17:00～20:00 土曜日 10:00～16:30

図書館利用案内

開館時間	
月～金曜日	8:30 - 20:00
土曜日	10:00 - 16:30
春・夏休み期間中	8:30 - 17:00
休館日	
日曜日・祝日 春・夏休み期間中の土曜日 年末・年始 12/26 - 1/5	

	貸出冊数	貸出期間
通常	5冊	2週間
卒研	3冊	2ヶ月

卒研貸出は通常とは別に貸出ができます。
対象者(学科4年生以上、専攻科生)

※試験期間前・期間中の日曜(祝日)については、
試行的に開館を行っています。ぜひご利用下さい。

学科推薦図書・JABEE関連資料・留学生向図書・視聴覚資料・参考書など
各コーナーに別置しています。

図書館内配置図

★非常ベル



海外の図書館

ミズーラ公共図書館 Missoula Public Library

周山 大慶

アメリカのモンタナ州ミズーラ市にしばらく滞在していましたので、その公共図書館について紹介します。

ミズーラ市はロッキー山脈の裾野に位置する人口約7万人の大学町です。近くにグレーシャー国立公園とイエローストーン国立公園があり、アメリカで最も美しい地域の一つと云われます。ミズーラ公共図書館はこのような広大な土地、色とりどりの美しい四季をもつ豊かな自然に恵まれた町の中心部にあります。

ミズーラ公共図書館は1894年に設立され、情報、文化、教育およびレクリエーションなどに関連するものを提供しています。2階建の館内に図書室の他、二つの勉強ルーム、若者ルーム、子供コーナー、新聞コーナーおよび二十以上のパソコンがあります。夏にマイクロバスを使った移動図書館もあります。図書館のすべての部屋にワイヤレスが提供されています。館内に自動式貸出機があり、セルフの貸出・返却ができますので、非常に便利です。私もよく雑誌、DVDと地図などを借りていました。図書館では定期的に読書イベント、若者および子供のイベントがあります。どのイベントにも気軽に参加できますので、いつも参加者が多く、とても賑やかです。読書イベントの時、同じ部屋に多くの人と一緒に名作を読み、時は遡り、アメリカのロマンを楽しめます。

ミズーラの町にはヨーロッパからの移民が多く、長く寒い冬の中、お互いに協力し合わなければ生きていけません。だから、町の皆さんは図書館での人との付き合いをととても大切にします。小さな図書館ですが、非常に利用しやすく、外国人の私達にもすごく優しいです。日本に帰国後の今でも、ミズーラ公共図書館のことを懐かしく思い出し、いつかまた訪問したいです。



(すやま たいけい 電気情報工学科)

【編集後記】

図書館報第49号をお届けします。お忙しい中、原稿をお寄せくださった皆様ありがとうございます。本号の各記事が読者や図書館の利用に役立てばと願っています。

明石工業高等専門学校図書館報 第49号 2014年1月発行

編集・発行 明石工業高等専門学校図書館 〒674-8501 明石市魚住町西岡 679-3 (078)946-6051